**「気持ちの言語化」の言語対照**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　井上優

【概要】

　発話に込められる話者の気持ちはさまざまな形で言語化される。しかし，どのような気持ちがどのような形で言語化されるかは言語によって異なる。日本語では，「これで安心です」という文は「これで」を強調すれば「これでもう確実に安心だ」という文になり，「来ないなあ」という文も「おかしいなあ」という気持ちで言えば「まだ来ないなあ」という気持ちの文になる。しかし，中国語では“这下我可放心了”“还不来”のように「確実に…だ（これ以外はない）」「まだ…だ（状況に変化なし）」ということを言語化しなければ，そのような気持ちの文にならない。逆に，日本語では「さあ，ちょっとわかりませんねえ」，「ま，１週間もあれば，まあ大丈夫でしょう」のように，発話にともなう話者の気持ちの動きを感動詞等で頻繁に言語化するが，中国語では感動詞は日本語ほど頻繁には用いられない。このことは次のように説明できる。中国語は構造上，言語形式によりコトガラの内容を具体的に描き出す必要がある言語であり，「これ以外はない」「状況に変化なし」といったコトガラのあり方に関わる気持ちは言語化しなければならない。しかし，コミュニケーション上は「相手の発話の内容に見合う内容の発話を返し合ってやりとりを維持する」ことが課題であり，話者の気持ちの動きを言語的手段で頻繁に描き出す必要性は低い。一方，日本語は，構造上は中国語ほどコトガラの内容を具体的に描き出す必要はないが，コミュニケーション上は「相手の発話により生じた気持ちの動きを敏感に表出して，自分と相手が領域を接していることを示し続ける」ことが課題であり，そのために発話にともなう話者の気持ちの動きを感動詞等で表出することが本質的に重要である。